ハチ博士のミツバチコラム 33

京都学園大学
坂本文夫名誉教授
（バイオ環境学部）

ミツバチと蜂蜜の文献

前回、蜂蜜採取の最古の記録として約一万年前のアラニアの岩壁画を紹介しましたが、日本での記録はどの様になっているでしょうか。太古の昔から自然の蜂蜜を採取していたことは間違いないし、何処かの横穴式住居や土器のかけらにミツバチの絵が描かれている可能性は高いと思うのですが、まだ見つかっていません。日本での最古の記録として、皇極天皇2年（西暦643年）に、百済の余豊という人が奈良・三輪山にてミツバチを放ち、養蜂を試みたが、上手くいかなかった、という記述が日本書紀にあります。

蜂蜜は昔から希少品として珍重され、貢物として国内外から朝廷に献上されていたようです。鑑真和上も日本への渡航の際に蜂蜜を持参したとあり、平安時代には蜂飼いの大臣、藤原宗輔（本シリーズ18回目で紹介）の逸話を始め、源氏物語などにも蜂蜜やミツバチについて色々な記述が出てきます（本学・山本淳子教授からの私信）。

養蜂の記述の中で秀逸なのはセイヨウミツバチが日本に持ち込まれる数年前に編纂された「蜂蜜一覧」でしょう。1872年にオーストリアのウィーンで開催された万国博覧会に出品されたもので、ニホンミツバチを使った養蜂の技術を精密な図入りで解説したものです。この博覧会は日本の政府が初めて公式参加した博覧会で、世界中に日本をアピールする場になりましたが、日本の伝統養蜂の優れた点を紹介する良い機会でもあったと思います。

イラスト おおくぼ ひとみ さん